書評

編集・発行
関西大学生活協同組合
組織部
「書評」編集委員会
編集人　田村民夫

吹田市千里山17
TEL 388—1121
内線 776

自由と民主主義の母—都市

羽仁五郎氏

都市の奪還を提言する

「都市連合」の形成へ

羽仁五郎
都市の論理
歴史的条件・現代の闘争
勁草書房・950円

〈1〉

現代文明のシンボルともいわれる「都市」。それは、この「都市」に、〃自然〃とは遮断された人間の生産物が縦横に密集しているからであろう。人間の歴史的行為が刻み込まれているからであろう。最近この「都市」が、広範囲な分野にわたって問題視されつつある。それは、歴史的考察のみならず、現実には生起する「都市問題」に対しての政治的処置、処方箋をも含めて多様である。その要因は、日本社会の全体像が直接的にこの「都市」に集中されていること、日本の「都市」が、戦後日本社会の歩みを雄弁に実証していることなどであろう。しかも「都市」問題への接近は、自から造りだしたものへの驚異とおののきも手伝っているのである。合理的、有機的生活様式を結晶化したもの—「都市」—への何とも奇妙な疎遠な気持、圧しつぶされそうな感情が「都市」への関心、挑戦として問題視されてきたともいえる。それらの〃関心〃の中味には皮肉と揶揄と嘲笑の声もあるのである。

だが、この書物—「都市の論理」—は、この様な〃関心〃〃挑戦〃への一つのエポックを画しているといえる。「都市歴史学」ともいうべき素描を通して「都市」の意義を冷静に究め、それに比しての「現代都市」の実態への警鐘いや挑戦として描かれている。

だから、羽仁五郎は、人間の必然な行為—自然を人間の生産的労働の蓄積によって凌駕し克服していく中で生みだした人間の自発的結集の〃場〃—「自由と民主主義」の結晶物への深い愛着をもって、現代都市の〃寄生虫〃を告発し、弾劾していく。書物の前半（第一部歴史的条件一頁—三九四頁）は、世界史を都市という一本の線をたどって描くユニークさ、後半は（第二部 現代の 闘争 三五〇頁—六二七頁）は論理骨格の太さ、展開の具体性として展開している。

だからこの書物をして〃都市〃への関心、接近を一そう短絡にさせ、密にするといえる。それはまたこうともいえよう。今までの多くの「都市」問題の扱い方が、その実態・実状に終始し、その問題の広さと深さに圧倒されてきたのに比して、この書物は、人間をして行為へと駆りたてずにおかない爆動の精神が脈々としていると。すなわち、現代文明への批判書であることを示す。同時に、かれが、かって自問したことへの解答としてであろう。その自問とはかくいう〃都市とは何ぞや。これにたいする答えのなかに、その人またその国またその時代の文化的また社会的の意識の水準が、かくすすべもなくあらわれる〃。（注1）

〈2〉

「第一部歴史的条件」の内容はこの書物が発刊される契機となった研究会での討論の中で折りにふれて出てくる著者の名著「都市」（一九四一年執筆・岩波新書四六年六月）を解説的にのべられたものが中心となる。著者の「都市」への分析視点は、次の彼の言葉で云い尽くされよう。「都市が、独立しているというのは、その都市が、その市民の政治的自由を基礎とする自治が実行し、市民的代表制がその都市の最高機関までをつらぬきその都市のすべての事務が市民自身の意志と手によって自主的に処理されるということである。だから文化史的社会史的に、都市とは、自由都市における市民的政治の徹底を意味せねばならないわけである。市民的自由あってはじめて都市ということができこれなくば都市ではない。」（注2）「都市において最も重要なる事項はなんであるか、それは市民である」（注3）著者によれば〃都市〃とは都市自治体としてその本質を示す。市民の自由な結合組織としてそこに自発的な運営と統制がかちとられるものでなければならないのである。「市民」の登場が、人間復権の証しとしてあり、人間史の意義が歴史的問われたこと。しかもその「市民」の登場が「都市」の発生とともにあったこと。このことが、羽仁「都市歴史学」の骨格ともいえるのである。人間の歴史への挑み、時代の支配者への反逆、抵抗の結晶として〃都市〃の本質を考察する。その論述は、例えば、古代ギリシャにおいてアテネでもなくアクロポリスでもない〃アゴラ〃にその源を端し、ルネサンス絶対王制の中での〃自由都市〃—同業組合を媒介とした自由な組織体—を人間復権の象徴として描いていくのである。もっともこの歴史考察は、すでに、先の「都市」の中で多様な歴史事実にふれながら展開している。この様に「歴史」を〃都市〃という一本の糸で考察するという独創性とその視点設定には、歴史学においての興味をそそるに充分である。確かに、〃都市〃の成り立ちが、人間の自然への君臨として絶えず人間史の苦闘を跡づけることは、西欧の都市に散見されうる。そこには必ずといってよいほどにその〃都市〃の特殊性、個別性が秘み、「民族の願」がのぞかれうることにもうかがわれる。例えば、〃城壁〃が、それに該当する。

日本の歴史には、この様な歴史的実証はあまりみあたらない。堺市などがその例外史実としてあるが。日本の歴史は、多く、国家の直接的支配として一貫しており、その人格的表現ともいうべき個人への偶像視（天皇制はその際立ったもの）が多いといえる。

だから、この書物の中に流れている伏線ともいうべき次の二点は日本史考察の興味をそそるといえる。即ち、一つとして、日本の場合、「個人」と「国家」の間に、都市を拠点とする社会という媒介環がないという歴史的意義、第二に、かかる歴史的体験を負わされた日本人の歴史意識—市民意識の内容が論じられ、日本人が語られ、日本史が跡づけられるという方法論が、この書物にもある。この方法論の是非はともかく「第一部歴史的条件」は先述した如き〃趣〃のある歴史分析といえよう。

〈3〉

さて「第二部・現代の闘争」の内容は、大別して二つに分けられる。前半は、現在都市の実態、暴露でありその〃都市〃に寄生する〃虫〃どもへの告発である、後半は、かかる「都市」を市民の奪還としての指針を〃都市連合の結成〃として展開する。前半は、現代日本社会における「都市問題」—交通・公害・警察・財政・土地などと広範囲にわたってその実態・実状の報告を提起し、それらの「社会問題」化する元凶としての資本とその人格者—支配層のカラクリ、連がりを切開しあばきだしている。その切開手術の〃礎〃は、第一部で考察した〃都市自治体〃であり、〃市民なき都市から市民の都市へ〃の復権を意図したものとしている。この考察は、次の引用に焦点をもったものといえる。

〃過去にむかって、また未来にむかって吾人は反省せねばならぬヘレニズム時代の都市に古典的世界のかたくなに凝固したすがたを見よ。中世の都市にその信仰の表現をみよ。しかるに、バロックの都市は、一人を頂点とした尖塔のようなその身分的秩序における絶対主義的統一を、そのままにあらわしていた。しかも吾人の都市は如何。あらゆるものを前代からとりいれて、現代の独自のものは、混乱のなかからまだはっきりたちあがらないのであろうか。つめたく、かたく、家に対して家が、互いにさしのべる手もないかのようにエゴイステイクに立ちならんでいる。商業建設は、互いにわめき立てて他のすべてを圧倒しようとするかのごとく、その周囲は悪趣味と趣味の過剰との無意味な氾濫これは利潤よりほかの原則を知らぬ資本主義の統制いな無統制のすがたであろうか。官庁建築のひややかな空虚な豪華版、中世的領主城郭好み、これらは今日の行政機構が、いたずらに過大をのぞみ、そのくせ目的意識の低い実情をしめそうとしているのであろうか。住宅の設備のあまりにもひどいちがいかた—ここには、階級対立の傷口が白日のもとにさらされている。」（注4）

〈4〉

現代文明の花—都市—は、同時に、現代社会の矛盾のたまり場である。国家の中央集権制下における都市自治体の出口なき実状がこの書物に白日にさらされている。階級対立を如実に顕わした都市—市民なき都市の実状は既にわれわれの日常性と化しているのである。この様な、〃現代都市〃の復権を、著者は展望する。〃煙突が生きて、人間が死ぬ町〃—都市を市民の都市へ転化するためにはどうすればよいのか。〃都市連合の形成〃を著者はよびかける。かって歴史の中でその芽を培かれ出した自由都市共和制連邦を現代的に適用しようとして。著者のこの提言は、確かに、扇動的ですらある。だが、同時に、われわれはつぎの事との関連で、この提言を実践的に活かさねばならないであろう。

国家機能の膨大さが、都市自治体の形骸化と不可分の関係をもつこと、即ち、国家独占資本の運動法則が、現代社会の基本的要因であること。都市自治体は、現在において概念の本質において現代的に展開し、復活されねばならないこと等の問題である。「都市歴史学」ともいうべきかれの視点のユニークさとその指針としての〃都市連合〃は、国家との関係でより机上的、没階級的スローガンと化す危惧を覚えることも確かであろうが、「都市」とは、本来、住民—人民のより直接的な行動形態の結晶であり、人民自治の具体化として位置づけていくことの必要性とその重要性は、実践的に大きな教訓としてあることは既にみてきた通りである。「都市」の復権が、国家の暴力的破壊を通じてしかなし遂げられねばならぬことを付記しておこう。

庵谷寿男（生協職員）

注1・2・4　羽仁五郎歴史論著作集（青木書店）第四巻「現代史・文明批評」
注3　羽仁五郎「都市」（岩波新書）

編集者への手紙

内田芳明

「書評」第8号に私の最近まとめて出した書物「ヴェーバー社会科学の基礎研究」（岩波書店）を書評として取り上げて下さり、それをわざわざ送って下さいまして有難うございました。書評の労をとられました石尾芳久教授にも感謝いたします。

書評は第三章「社会層と宗教倫理の相関」についてだけのものでございましたが、石尾教授の御丁寧なる御紹介に特に私として念のため一言つけ加えさせていただくとしますれば、第二章に関する限り次の点です。すなわち階層としての「中小市民層」とか「虐げられた社会層」とかは歴史上あらゆる時代のいたるところに存在していたことまたそれと結びつく救済宗教の宗教性も歴史上種々さまざまの方向と性格のものであったということ、したがって変革の主体としての歴史的機能を果すばあいは、「虐げられた社会層」と「救済宗教」との結合という条件だけあれば必ず生ずるというわけではないこと、をヴェーバーもそして私も強調している点です。虐げられた民衆の困窮の利害状況が一方にあって、他方でその大衆に生活形成の方向にそのエネルギーを与えるべき理念の指示が他方にあるとき、そして両者が結びつくとき、その運動＝文化形成の方向は、まさにその言葉なり理念なりの特質と方向によって、またその虐げられた当の社会層のおかれている歴史的性格や状況によって、極めて多様な方向に歴史的個性的に決定されるであろう、ということです。その際、過去の世界史上の史実に即して言うかぎり、ヴェーバーが分析し叙述しているような一つの例外的典型的ともいいうる現象、つまり、ユダヤ＝キリスト教の予言精神と西洋的都市的発展を前提基盤とする商＝工業的中小市民層との結合の中から、合理的世界改造の諸運動と文化が発生展開しえたということが認識されうるわけです。つまり、このようなことの背後には、歴史における法則ないし規則性と歴史的個性的現象との関係についてのむづかしい問題が横わっております。この点はこの本の主題をなす第一章の「ヴェーバーにおけるエートス論とプラグマ論」の中にいろいろの関連でできうるかぎり論及しておきましたので、ぜひとも歴史理論のこの根本問題にも止目しつつ読んでいただくことをお願いしたいと思います。マルクス主義とヴェーバー社会理論との批判的媒介の問題についても著者は本書の全体が学界に刺激と示唆を与え得んことを期待しております。

右、かんたんながら書評誌と石尾教授とに対する感謝に代えて一言のべさせていただきました。（神奈川大学教授・社会経済史専攻）

ZENGAKUREN DOCUMENTS

全7巻・別巻1　三一書房編集部編

資料　戦後学生運動

学生運動の資料は、ともすれば乱雑に散らばり未整理のまま放置されやすいが、本書は、戦後直後から現在までの学生新聞、細胞機関紙、会議議案・議事録、書記局通達・指示、会議メモ、意見書、個人論文、ビラ等を全国的に網羅・蒐集し総合的に収録した。

第1巻 1945—1949 発売中

戦後学生運動の出発は、形骸化した学園の民主化と軍国主義的残滓の一掃の闘いから始まった。全国的に起った学園民主化の嵐と闘う学生組織の建設、二・一ゼネストの挫折を転機にした運動の低迷と苦悩、四八年の〝教育復興闘争〟の展開と〈全学連〉結成、大学法反対闘争の勝利を経て、五〇年分裂の前段階までの資料を収録。

定価　3000円　刊行記念特価　2800円

★体裁菊判・上製箱入　8ポ二段組　7ポ註　各巻平均530頁

ことば・言葉

名取榮史

或る世界の崩壊から……

福田恒存　解ってたまるか!

一

過ぐる三月半ば頃の一夜、私は毎日ホールの客席に座っていた。舞台では劇団NLTによるエドワード・オルビーの「デリケイト・バランス」という芝居が熱っぽく展開されている。このオルビーなる人物は、ある批評家にいわせると〈現代の世界演劇界においてもっとも素晴らしい才能を秘めた二人のうちの一人〉であってアメリカの新進である。ついでにいえば今一人はわが三島由紀夫である。客席にはかなりの空席が目立っている。私は舞台に眼を凝らしているうち、一種、戦慄に似たものを覚え始める。俳優が、すなわち中村伸郎が、南敏江が真咲美岐が熱演すればする程、それがまばらな暗い客席へ何のいらえもなく吸ひ込まれて行くといった感じなのだ。大ていならば眼に見えぬ舞台の熱っぽさが息をひそめた観客に確かな手応えをもって受けとめられ、それから又舞台に跳ね返って、劇場全体がむんむんとした熱気で充満されるのだが、これは熱気どころか冷気がただよっている。

夫婦、親子、姉妹、親友間における微妙な関係、それを結ぶはずの愛情のそらぞらしさが描かれ、それを通して中産階級の基盤が無惨に崩壊していく、彼独自の主題を打ち出した芝居である。一人々々の登場人物がまるで神経をむき出しにし荒っぽく残酷に滑稽に野卑に傷つけ合う芝居である。それでいてその底にチエホフ流の静かな労わりにみちた情感が流れている芝居でもある。が、それにもかかわらず、私をして肌寒い空怖ろしさを覚えさせたものは何であろうか、私の場合、それは言葉であった。人々のあいだのデリケイト・バランス〈きわどい均衡〉を容赦なく崩し去る非情の言葉である。この時、私の覚えた戦慄の因は正しく言葉であったようだ。

二

言葉である。〈とめどなき崩壊への言葉の流れ〉が今福田恒存の新作喜劇「解ってたまるか!」を読んでいる私に、三月のオルビーの舞台と共に心に甦らせたことである。

「自由」七月号に発表され、今一篇の作品と共に装を新たに刊行されたこの「解ってたまるか」は正統派リアリズム演劇の一成果である。話はかのライフル魔金嬉老事件に大体の筋を借りているというものの、主題、性格などは勿論作者の創作である。

ときは〈昭和四十三年冬〉処は〈米大使館近くに在るホテル・ハイクラス〉。四幕からなるこの劇はホテル内に設けられた捜査本部とライフル魔の部屋がかわるがわる舞台となる。登場人物は余りにも多すぎる。だが主人公のライフル魔村木明男を除いては、彼らのすべて、その置かれている組織を離れての個人の立場はさして重要ではない。そこで幾つかのグループに分けよう。即ち、捜査本部、人質、報道班、文化人グループ、全学連の学生代表。折しもホテルの前の建物アメリカ大使館へは学生デモ隊が押しかけている。人質を従えてホテルの一室に立て籠る主人公を軸に、捜査本部と報道班・捜査本部と村木。報道班と村木・文化人グループと村木。学生たちと村木。人質と村木。或いは捜査本部内部。報道班内部。人質内部。と云った工合に縦横に関係の糸が編まれている構成である。

福田恒存氏

三

武田（報道陣に向って）静かにして下さい、絹川巡査部長による村木説得の経緯について捜査本部長から発表があります。瀬戸内さん、どうぞ。

瀬戸内、結論から先にいえば…失敗です、御存知のように、村木がこのホテル・ハイクラスの正面玄関に例の盗んだジャガーで乗り込んだのが夜中の一時、ベル・ボーイに命じてスーツケース、段ボールの箱、その他計五個の荷物を運ばせ、フロントの前でライフルによる威嚇射撃を行ない、偶々居合わせた、鈴木支配人を案内に立て、ハイクラス最高の部屋に案内しろと命じ、あの棟の端の三間続きの一〇一八号室に陣取るや否や、直ちに戸口に現れ廊下に向ってライフルを構え、廊下の両側を制圧し、外国人を含む十二人を人質となし、ホテル到着からおよそ十五分後の…。

明石　その話はもう聞きましたよ。

武田　それは副部長の春野君から説明したことで…。

春野　いや、あれは捜査本部設置前の話で、単に麻布警察署長として申上げただけの事です。からして捜査本部が設置された以上本部長、の瀬戸内刑事部長から正式発表を聞いていただきたいと思います。

明石　しかしですね、正式発表の方が署長の談話より…。

武田　御紹介します、捜査本部が設置されて、春野君は私と共に副部長に任命されました、これからは署長と呼ばずに副部長と呼んで下さい…

これは見事な風刺である。作者は劇中、現代のありとあらゆる面貌を痛烈に暴き風刺する。一つの機構の内に置かれそのからくりに振り廻される人間、又それにかかずらう人間達の傲慢さ、誠実さ、愚かさの滑稽な戯画化である。ここで、言葉は機構のなかの人間の虚飾を剥ぎ取る諷刺の役目を果たしている。更に作者の諷刺の筆は、全学連、檻の中の人間達、文化人グループと、苛烈さを加える一方である。

さて諷刺は人間だけを相手にしているのではない。凡ゆる事象をその対象に捕えてしまう。情感を喪失した人間たち。ショッキングな筋立、人間疎外の主題、クリシェとジャルゴンばかりの空疎な会話、文化人グループとの対決の場は一見、ベケット、イオネスコ、ピンターらの不条理演劇を連想させるシーンである。作者は自らかかるシーンを拵えて置いて、現代の所謂不条理なるものを叩き潰そうと試みる。

村木　それは詰り、私は先生の先見の明を保証し宣伝する為に、こんな事をやらかしたという事ですかね?

大浜　結果としてはね……。

村木　では動機としてはどうなります?

大浜　それが「ライフルの不条理」という私の作品のテーマなのですよ……つまりですね、この世の中には法律の枠に随い、世間的良識の枠のなかでは、どうしても自己表現の出来ない、そういう自己というものも存在し得るという実存的主題です…。譬へば刃物によってしか世間と繋れない少年もいれば、ライフルによってしか世間と繋れない男もいるのです。こういう風に徹底的に世間から疎外された人間に対して、

村木　………やい、へちゃむくれのがんもどき野郎、もう一度いって見ろよ、何だと……、刃物やライフルによってしか世界に繋らない人間がいるだと?冗談言ってはいけない、そんな事を言ったら酔払い運転によってしか世間に繋らない人間もいらあな、モノグサ、ヘッピリ腰、人間蒸発、詐欺、賄賂、強姦、その他何でも彼でもによってしか世間に繋らない人間もいるんだぜ、さうよ、警棒や原爆によってしか世間に繋らない人間もいるじゃないか……

然し、後者で語る作者自身の言に注意を払うべきであろう。「解ってたまるか!」を単に文化人批判の風刺劇と見られるのは甚だ迷惑である。ここに登場する文化人はそのためにのみ風刺劇を書くに値しない。

しからば

四

言葉が自己を表現する最大の媒介手段であるとして、はたしてその言葉が自己のすべてを、その真実を万遺漏なく語り得るのかわれわれの感情、思惟を完全に伝え得ることは不可能だとしか答えようがない。その場合、人々はどうするだろうか。先ず、僅かばかりの慣用的表現事例を貯えておいて、ありとあらゆる陰翳をもつ繊細微妙な心の文（あや）を伝えようとする。いつも同じ公式的な言い方に終始するのである。村木明男は学生達に向かって叫ぶ〝言葉、言葉、言葉の行列か!／われは知る、テロリストの／かなしき心を—／言葉をおこなひとを分ちがたき／ただひとつの心を、／奪われたる言葉のかはりに／おこなひをもて語らんとする心を。／解ったか、噛の誓いの?奪われたる言葉の代りに、行ひを以て語れ…〟

然しその極は、有限なものを以て無限なるものを伝えることの絶望を悟って遂に黙して仕舞うのである。やはり、同じ個所での村木の言である。〝……俺は今ここではっきりヴイエトナムとの団結を、そして全米国内の黒人との団結を宣言する、もはや沈黙は共謀を意味するのみ、援助も攻撃もせずという傍観的立場には耐えられない、俺は自分に許された武器を以てアメリカ政府への徹底的抗戦を開始する—〟と学生達にダイナマイトを持っていくよう促すのである。言葉の貧しさ—たとえ饒舌であってもやはり貧しいことには変りあるまい—が絶望の沈黙へと繋り、一転して行いへと転身する、そこに間違いの喜劇がくり広げられる。

五

真実を真実のままに伝え得ぬ言葉によって人間関係が成立していることの殆さ。ひとたびその人々が極限状況に置かれると、それは死を以て脅かされる人質たち、或るひはその他の人々の場合であるのだが、そうなるとその言葉の脆弱さ故に、というよりは言葉の巨大さに対する人間の脆弱さ故に忽ち人間関係は崩れてくるのだ。言葉——沈黙——行為という先程の径路とは逆に、言葉を修飾の創作し駆使して語り続ける行き方がある。如何なる状況に置かれても、自己の属する機構を、社会を、人間関係を維持しようとすれば言葉を途切らしてはならない。始めの真実から如何に遠ざかろうと問題ではない。人質の一人関山が村木に対してダイナマイトを振りかざし、テロリストと自称して、この状況を変えようと身構える。然し、最後の土壇場で彼は村木に総べては出鱈目だったと怖れに震えながら許しを乞うのである。その時の村木の答える科白である。〝この腑抜けめ!出たらめとは何だ、出たらめとは!俺はな、勿論、始めから本気にしてはいなかったさ、本気にしていなかったが、それでもあれだけお前さんの芝居に附合ってやったのだ……、譬へ嘘でも、あの時お前さんは真剣だったではないか?なぜ、その真剣を捨てたのだ?一度、嘘を吐いたらな、最後まで頑張り通すものさ……それを今更「あれは皆、出たらめです」などと抜しやがって……全く附合の悪い奴だ……、それではこの俺はどうなるのだ、お前さんに附合って、原爆まで持ち出したこの俺はとんだ三枚目、引込みが付かなくなるというものではないか?〟一切の人間関係を成立させるのも言葉であるがその人間関係を断絶させるのも言葉なのだ、たとえ始めの真実から遠ざかろうと第二の真実が生まれる。オスカー・ワイルドはうその効用を説いた。うそから出たまことである。芝居は本来、現実人生を潤色するものであるが、劇作家福田恒存は人生もまたいかようにも潤色のきくものであると考えるのだ。シェークスピアの何気ない言葉「人生は芝居である。人はそれぞれ自分の持時間だけ舞台を勤めて、時間が来ればさっさと消える役者なのだ」といった意味の言葉に、彼、シエークスピヤの悟りすました消極的逃避的人生観よりはむしろ人生に対する積極的な美的な彼の姿勢を窺うべきであろう。作者はかくしてシエークスピヤの立場に立っている。

六

社会の機構を作ったのは人間である。人間関係を打ち樹てたのも人間である。処が機構が人を動かし、関係が人を動かす。そでも両者を〈きわどい均衡〉を保ちながらも存在せしめていたのが言葉である。しかし本来サブスタンシャルを機構とか関係などあろうはずはない。作られた虚像にしか過ぎないのだ。本篇の主人公ライフル魔村木は同時に作者の影の存在となって狂言回しをも演じている。個人の属する組織を、社会を、人間関係を各々との対処の中で瓦壊せしめ、はては、個人をも、分裂する細胞の如くばらばらにしてしまう。飛び交う言葉をその方向へと定めるパイロットが村木明男に与えられた主たる役割であろう。彼によって、その拠って立つ仕組を崩され、劣悪の人間の弱小さを露呈する破目に追い込まれる。だが、露呈すべき個人が原質が果たしてあるのだろうか。言葉に虚飾され、その仮面がいつしか生地となり、脱ごうとしても脱げず、また脱いだところで仮面の下の顔が未だあるのだろうか。この命題は今日にあって別段目新らしいものではない。世間という仮面の正体を暴いて、これを破壊する。然しいつしか仮面の下にしかその生命を保ち得なくなったその顔も消えていたのである。幕切れの場面は極めて強烈である。長きを厭わず掲げよう。

（村木、黙って前方を見たまま立ち尽す、その化石のような姿からは二度と言葉が聞かれるとは思へない、瀬戸内の合図で一同退去、廊下を駆け去る音）

村木　皆逃げて行ってしまいやがった、全くたわいの無い、これが世間というものか……、俺を除け者にし、いつも俺を弾ね返して受け附けなかったあの冷い世間の奴は何処へ行ってしまったのだ……、俺は今まで何処に立っていたのだろう、あの何よりも堅い鐵の上ではなかったのか……、世間というやつは俺がその上で幾ら暴れ廻ろうとびくともしない堅い鐵ではなかったのか……、どうやらそういうものではないらしい、世間は鐵ではない、唯のかはらけだ、どろどろの底無し沼だ、綿の様な雲塊だ、何の手応へもありはしない……、俺は一体何をしたというのだ、自分の手で自分の立っている土台を打ち毀してしまっただけではないか……、それでどうなった、俺を除け者にし、物の数にも入れていなかった世間という巨人を叩き殺して、俺の方が奴よりもずっと強いのだという事を思い知らせてやった瞬間に、俺は一人ぼっちになってしまった、思い知らせてやろうにも、その相手が何処にもいはしない…、はははは、これこそ紛れもない完全犯罪というやつではないか、巨人を打ち殺した俺の強さを見ていてくれる者が一人もいないのだから…、こんな事になるなら、除け者にされて甘えていた者がよほどましだった……、見ろ、沈んで行く、沈んで行く、俺の足の足もとで世界が沈んで行く…、皆、何処へ行ってしまったのだ、頼む、俺を置き去りにしないでくれ。

（蜃気楼のような紗幕が降りてくると同時に、その向うで背景が飛び、村木がこのホテルの屋上に立っている事が解る。日の出前、東の空が白くなっている。その方へ駆け寄り倒れる。

原爆と称する物を開け、中から焼芋を取り出して一口食う。）

村木（立上って）誰もいない、人間の匂いが少しもしない、町は死んでいる。清潔な廃墟だ。……

原爆と称して人々を恐怖につき落した物の正体が焼いもであったというのは象徴的である。

さて絢爛たることばによって、言葉と人間とのかかわり合いを説き明かしてくれたこの作品にそろそろエピローグめいたものをつけねばなるまい。作者はこの〝解ってたまるか〟なる作品で、言葉に二重の意味を持たせたのである。即ち主題としての言葉と、技法としての言葉である。少くとも私自身はその視点から作品を眺めたのである。たとえば、これとならんで収められた「億万長者夫人」のきらびやかに豊かな言葉のちりばめは飽く迄技法としての意味しかもたない。それによって諷刺されるものそれ自体が主題である。その故に「億万長者夫人」によって福田恒存は日本版現代コメディー・オブ・マナーズを書いて見せた。この戯曲は従って風俗喜劇でもなければ所謂不条理劇でもない、無理にいえば正統的な古典写実演劇ではあろうが彼独自のカテゴリーを編み出したわけだ。

しかしながら一時の空怖ろしさを覚えながらもその恐怖が私の心底に沈でんしなかったのは何故であろうか。本の扉の裏に次の句が示される。「蜃気楼は突如として現れ、突如として消えた。が、このドラマは現実の事件とは何の関係もない。遺憾ながら…。」

作者のこの作品に対する姿勢、若しくは正体、そしてまた、私の一刻にしか過ぎなかった怖れ、総べてこの句に窺うことができるのではあるまいか。

私はまた、自らにこのような図式を描いても見るのだ。諷刺の言葉によって、**静止した或る世界**を「億万長者夫人」に表現した、彼は「解ってたまるか!」で諷刺の言葉によって**ことば**（従ってことばの上に成り立っていた**或る世界の崩壊**）を摘出し、次には、当然崩壊した廃墟の上に蜃気楼に非ざる**新しい世界**を動的に創造すべく義務づけられよう。それが到底叶わぬ作業であろうと。そしてそれには、ドン・キホーテの手を借りるのも当然の仕儀であろう。この原稿が活字になる頃、多分、私は再び毎日ホールの客席に坐っていることだろう。舞台では、福田恒存の最近作「ドン・キホーテ日本に現る」が演じられている。

（文学部教授）